



○ みすゞさん

すみません。また、かつて発行した記事を使わせていただきます。KOCHO だより②5号のつづきという感じの内容です。

昨年山口県教育会岩国支部の主催で、金子みすゞ記念館館長である矢崎節夫氏の講演がありました。30年近く前に彼女の詩集が紹介されてから私もたくさんの詩にふれてきました。改めてこの講演に、正直なところ私はそれほど期待していませんでした。しかし、教師のあり方や教師という職業のよさなどについて、この歳になって新たに気付かされる内容でした。この紙面でそれを紹介するには私の国語力が不安ですが、いくつか取り上げてみたいと思います。

「私」と「あなた」という二つのことばがあるとき、通常私たちは「私とあなた」というふうに表示します。それを「あなたと私」と入れ替えると“あなたがいてこそこの私”というふうなニュアンスに変わります。両者を「私」「教師」「児童・生徒」「子ども」「親」「先生」「保護者」などに入れ替えてみると、いろいろなことが見えてきます。

私の教職人生前半の学習指導案を読み返してみると、文末表現が「～させる。」となっており、授業では生徒たちに「～してもらいます。」と言っていました。後半は生徒が「～する。」というふうに直し、授業では「～しよう。」と言うようにしています。授業は誰が主役なのかを考えておくことは大切ですね。同じ内容でもことばの使い方次第で“自己中心”“上から目線”“おごり”になります。あらためて確認した次第です。

次に「わかる」ということばを入れ替えてみられました。「かわる」になります。ある事柄が分かると子どもはその瞬間に変わった(成長した)のです。学校の教師という仕事は子どもたちが分かり、変わり、成長する姿を見る喜びがあります。我々教師は子どもたちからそういった「命のシャワー」をもらっているんですね。よい仕事に従事していたんだと新鮮に前向きな気持ちになりました。保育士をめざしている学生たちはやりがいのある仕事に就こうとしています。がんばれ!

もちろん集団生活の中ではときどきトラブルが起きることもあります。その時はしっかり対応して、そのトラブルを成長のためのよい経験に変えてやりたいと思います。保護者・ご家庭の皆さんも未熟な子どもが失敗をして叱らなければならない場面をたくさん経験されていると思います。(これからもあるでしょう。)家庭と学校そして地域のみんなで見守り育てていきましょう。

※ この記事のものは小学校長のときに作成したものです。少しだけ内容を変更していますが、教師でも保育士でも同じだろうと思います。

自校自賛



玄関周辺の花たち



すぐそばにある大蔵池公園 中学校の陸上部も活用しています